Nest of　Dragon　～炎の契約～

神酒　羽乃魅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｎｅｓｔ　ｏｆ　Ｄｒａｇｏｎ　～炎の契約～

【Ｎコード】
Ｎ２２８２ＢＡ

【作者名】
神酒　羽乃魅

【あらすじ】
主人公である　桜夢　美智霞　は、生まれる時に母をなくし音を失った。小学校で親友ができ、中学校でクラスが分かれ、つらい日々をおくっていた。しかし、そんな美智霞がある日、ドラゴンに出会い、ある契約をすることになるのだが・・・。
その後、美智霞の日常は一変する！
契約内容と違う報酬までもらっている事に気づき、
ある重大な秘密を知ることになる。

壱　最悪な目覚め

目が覚めるとそこは、ただただ真っ白な部屋だった

私が身に纏っているものも、シミが目立ちそうな白いものだった。

しかし私の横には一つ・・・、いや一人白くない人が私を見つめていた

「お父さん？」

驚いたように父は私の手を握った。

「うっううっ！よっ良かった。本当に良かった！死ななくて本当に・・・！！」

「！」

いやそりゃ驚くよ！だって何がなんだか分からないのにいきなり親に死ななくて良かったって言われたら。

「うっ！」

頭が痛い・・。ズキズキする・・。

冷静に考えないと・・。思い出せること全部とりあえず・・。

・・・・？

まって、今私父さんとしゃべってた・・・。

父さんの声が聞こえた。生まれて初めて・・・・。

確か私、耳が聞こえなかったはずじゃ・・・・・。

いや、そうじゃなくてまず、

自分の事思い出して、そっから整理しないと頭が追いつかない・・・。

私の名前は桜夢　美智霞、１３歳。もちろん女。

女じゃなかったらむしろ気持ち悪い。

それで今年中学校に入学したばっかり。

あと、えーっと・・・・。

「美智霞??」

父は心配そうに私の顔を覗き込む。

「なんで?私この通りぴんぴんして・・うっ!ぐっゴホッ!ゲホゲホッ」

腕を振り回した瞬間、

私の背中に骨盤から首まで背骨を駆け上るような激痛が走った。

すると白衣を身にまとった人が私の背中を察すってきた。

とても申し訳なさそうな、まるで私を哀れむような視線・・・・。

察しがついた。

ああ、なるほど・・・・。納得だよ。

でも頭の中でいくら落ち着かせようとしても、そんな冷静に構え

ていられなかった。

恐怖。生まれて初めてだ。こんな恐ろしい恐怖は・・・。

いじめられても、けなされても

今なら全然怖いなんて思わないだろう。

「・・・・」

医者は黙ったまま私の背中をさすり続ける。

「なっなに?何なの先生。私ちゃんと受け止めるからさ。」

患者に気を遣わせるなんてとんだ医者だよ。

しかし医者は私に背を向け、父さんに一言

「ついて来てください。」と。

部屋で一人になり、すこしほっとする。

ほっとするあまり真っ白なシーツに水が零れた。

何でだろう??一人になると、こらえてた物が溢れてしまう・・。

こんな姿、父さんに見せれないよ。

落ち着いてすこし頭を整理する。

私もやるべきことがある。

まず、昨日の出来事を思い出すんだ。

そうすればきっと、私の身に何が起こっているのかも分かるはずだ。

しかし私はそのまま眠りについてしまった・・・。

弐　初めての親友

私は小学校のときから、ほとんど一人ぼっちだった。

何か集団で行動するときは、できるだけ嫌そうな顔をする子達を避けて

グループに加わった。

小学校六年生のときに初めて、やっと分かり合える友達に出会えた。

彼女の名前は　神前　亜莉那　。

親友になれた。彼女は筆談で私と会話してくれた。

耳が聞こえない私にとても親切にしてくれた。

それから1年間、二人で多くの行事や物事を一緒に楽しんだ。

楽しいほど時間の流れは早く、ついに卒業式を向かえ・・・・。

私はそわそわしながら、ポケットからシャーペンとピンクのメモ紙を取り出し

亜莉那に見せる。

『中学校入って、もしも違うクラスになったらどうする??』

『どうするって、美智霞ってば心配しすぎだよ!!』

親友が笑っている。

私はいたって真剣なのだが・・・。

『だってクラス１０個もあるんだよ?それじゃあさびしいよ』

『大丈夫だって!学校が違うわけでもないんだし、ほら!部活とか同じとこ入れば
いつでもあえるでしょ?』

親友は私にほっとさせるように微笑み、シャーペンとメモ帳を渡してくる。

すこし不安は残っていたけど、親友の顔を見て落ち着くことができた。

私は満面の笑みで親友のほうを向き、大きく頷いた。

彼女だけを信じて・・・。

参　裏切りは突然に・・・。

中学校のチャイムの音が鳴る。

私は１－２で小説を読んでいる。

彼女・・・私の親友だった人は１－９で友達と騒いでいる。

なぜこんな事になったのだろうか・・・。

そもそも亜莉那が同じ部活に入ってくれなかったのが始まりだ。

私と一緒に行こうといっていた陸上部に入らず、新しくできた友達と

テニス部に入った。

その上、最初は休み時間、一日に3回くらいは私の教室に遊びに来てくれたり、

私が彼女の教室に遊びに来るのを彼女が待っていてくれた。

なのに近頃は一週間に一回あるかないか・・。

私が行ってもドアの外なぞまったく気にせずに

仲の良い友達と騒ぎまわっている。

少しの間だけだと思っていた。

彼女が私を裏切るはずがない。

しかしそれは私の誤解だったようだ・・・。

今日久しぶりに教室移動のときすれ違い目が合った。
気分が晴れたが、それもつかの間。

ニコっと笑おうとしたが、彼女はすぐに目をそらし、楽しげに友達と喋っていた。彼女の長いポニーテールが私に背を向けた。

しかしそんな学校生活の中唯一幸せだったのは、梓縞（しじま）　亜貴斗（あきと）
彼が私に笑いかけてくれることだった。

彼はみんなに優しく、私にやさしい笑みを浮かべてくれる。

小学校の４年生のころからずっと、彼の笑みを見るのが大好きだった。

クラスの男子は私に声が聞こえないことをいい事に、
わたしに意地悪ばかりしているっぽい。

ホント誰かとは大違いだわ。

チャイムの鐘の音を聞き私は一人で部室へ向かう。

早めに行かないと、人がいっぱい来ると嫌なことしか起こらない。

校舎を懸命に走りぬけ、部室のドアを思いっきり開閉する。

フウっと一息入れ、急いで着替え一人で部活を始める。

今の陸上部は先輩がほとんどサボっているため

別に誰が何しようが怒る人も居ない。
顧問も居ない
ほとんど真面目にやっているのは私だけだが、
それでも人が来るんじゃないかと心配になる。
走るのは気持ち良い。
何もかも、走っている間だけは忘れられる。
唯一不満があるとすれば
走るときに風を掻き分ける音。それが一度で良いから聞いてみたいと思う。

二、三時間ほどしてすべてのメニューをこなし
帰りの用意をする。
荷物を背負い一人校門に向かう。
しかし私はそこで見たくないものを見ることになる。
（あれは、亜貴斗くんと・・・・・。）
もう一人女の人が見える。男の人だったら気にしなかったのに。
ちょうど彼らはプールの裏で楽しげに会話していた。
女の人のほうは・・・竹内（たけうち）　凜禰（りんね）ちゃん？？

彼女は中学に入ってから私の代わりに親友の横を歩くようになったこのひとりだ。
私とは何もかも正反対で何でもずばずば言える。
でもなんで彼女と亜貴斗くんが??
こっそり覗いてもばれないだろう。
そう思い影で彼らの様子を伺う。
亜貴斗くんが笑っている。
女子とはあんまり話さないのに・・・。
あ！みたくないもの見てしまった。
次の瞬間、私はその場から逃げ出した。
「あうう！うあああああああーーーー。」
私が今走れる精一杯の力でとにかく走った。走った。
何もかも忘れるために。
しかし、忘れようとすればするほど
私の頭にあの映像がよみがえる・・・。
彼女、凜禰と亜貴斗は仲良さげに腕を組んだのだ。
彼らは私に気づいただろうか。
もう嫌だ。

こんな報われない人生。ひとつくらいいい事あってもイイじゃないか。

横断歩道を急いでわたり、家へ直行する。

かばんに手を突っ込み、カードキーを出す。

父は仕事だ。

母はどうして私なんか生んだのだろう。

生まなかったらきっと、母も父も生きたまま楽しくやっていけただろうに。

私も意識を持たずにいられただろうに・・・。

ドアを開けて二階へ駆け上がり、自分のベッドに倒れこむ。

ううっ！なんで？何で私ばっかり・・・。

その日私は夕飯も食べずに寝てしまったという。

四　契約者Ｄｒａｇｏｎ

暗い・・・。気持ちの悪い夢。

何にもない。

どうせ夢ならもっと楽しい夢が見たかった。

いや、夢なんか見ずに何も考えずに眠りたかった。

は～。よりによってなんでこんな日にこんな夢みるのよ・・・。

「おい。」

うん？今何か聞こえたような・・・。

でも私声聞こえないし・・・。ってこれ夢だし関係ないか。

「おいってば！」

何よ、こいつ。うるさいな。

きいこえてるっつーの。

「はいはい、なあ・・・・。」

「に」と続けるはずがそこでとまってしまった。

息も声も出ないくらいに驚いたから。

声の呼ぶほうには、見ず知らずの生物がいたのだ。
それだけならともかく、そいつからは物凄い気迫が感じられた。
震え上がった。

「ぷふっ！初々しいなあ！まあ初めは皆そうだから、
おめーが珍しいわけでもねーけどな。」

驚き怯えて、しっかりと見ていなかったけど
よく見るとまったく見覚えがないわけでもない。
それは小説や絵でお目にかかったものだ。

「ドラゴン？」

私の小さすぎる声はやつには届かずに、心の中で反響した。

「・・・・。」

「・・・・・。」

「・・・・・・。」

「・・・・ってなんかしゃべれよ！」

「ふっ。なかなか生意気だな貴様。腰抜かして何もしゃべっていなかったのはお前だろに。」

なかなかムカつくドラゴンだ・・・。

「・・・で？」

「困ってんだ。ちょっと協力してくれねーか。　いそいでっから早めに決めてくれ。

別にただでやれとはいわねーよ。契約ってやつだ！」

なぜかドラゴンは自慢げに語る・・・。なぞだ・・・。

なんにせよ怪しい・・・。

怪しすぎる。

夢とはいえ面倒事にあうのは本当にゴメンだ。

「すみません。母に知らない人の話し聞いちゃいけないって・・・。」

母はいないけどここはやっぱり決まり文句。

相手が知ってるはずないし何いったって別にいーだろ♪

しかし奴は小ばかにした顔と同時に哀れむような顔で私を見る。

「そこは知らない人についてっちゃいけません！だろ。決まり文句は。

知らない人に道尋ねられてお前は逃げるのかよ！」

なかなか鋭い突っ込みありがとう！

って別に待ってたわけじゃないよ？この突っ込み。

「それにお前、母なんかとっくの昔に亡くなってるだろが。

お前が生まれたときにな。」

「！！」

知ってるはずない。はずないのに・・・！！

「うそ？なんで！えっなんで？？」

「なんでって。そんな驚くこたぁねえだろ。お前らとは別の生命体。

どんな能力持ってたっておかしくねーだろ。

それにお前の夢の中に入るには、必要な情報だしな」

低く太い声が暗闇に響き渡る。

ん？夢の中に入る？？どういうこと？？頭が破裂しそう・・・。

ていうか、自分で別の生命体って言っちゃてる。やっぱりそうなんだ。

って当たり前か。

「そうじゃなくて、契約のほうに話し戻して！

契約の内容聞かないと答えようがないよ。」

「ん？ああそうだな。すまん。」

「先に報酬が何か教えてくれる？」

図々しいやつかもしれないがこれは大事。

面倒なことに巻き込まれて報酬がしょぼかったら
最悪だもん。
それに所詮夢。現実になったとしても
面倒なこと、つまりは魔法とかそっち系の事になって
問題が起こったらもうあの忌々しい学校に行かなくてすむ。
「お前が一番望むもの、ひとつだけ叶えてやろう。さすがに何でもは無理だが
現実的にありえるものなら叶えてやれるぞ。」
私はひとつピンっときて答える。満面の笑みで。
「じゃあ殺して♪」「・・・・・・。」
無表情ｖｓ満面の笑み。そのまま暫(しばら)くたった頃、
しゃべり始めたのは「別の生命体」だった。
「お前、無理すんなよ。俺にはお前が本当に叶えて欲しいことぐらいわかってるんだぞ。
かなえられるんだぞ？」
「・・・。」
「つらかっただろう。耳が聞こえねぇせえで大変だったんだな。
お前さえ望むのなら、俺はいつでも叶えてやる。頼みを聞いて

くれたらだが。」

私は黙ったままうつむいた。

思い出したくない過去が涙とともにあふれ出す。

私は表情を変えてピシッと顔を上げた。

「なかなか口上手ね。いいわ。

報酬はそれ・・・私の耳が聞こえるようになることでいいわ。

でもまだ頼みごとを聞いてないから、契約するかどうかはまだ未決ということで。」

「おう！俺たちはな、とある事情でお前たちのいる世界にいるんだが、

行動するときに身を置く場所が必要になんだよ。

しかし、どうしてもこの世界に用事があってな～・・・。」

話が長いのは嫌いだ。私は腕を組み話をさえぎる。

「前置きはいいから！！単刀直入にいってくれる？」

「まったくせっかちだな～。仕方ねえ。つまりはだな。えっと、その～。

お前の背中に住まわしてほしいんだ。最初は副作用とか出たり、

すぐに報酬の結果が現れなかったりするが、お前なら大丈夫だろう。」

「・・・それだけ？」

あっけにとられた顔で聞き返す。

「たまに俺の用事に付き合ってもらうことになるが、おお。それだけだ。」

「いいわよ？」

「よっしゃ！契約成立だな。もう寝てもいいぜ。」

奴はスーッと暗闇の中に消えていった。

そういえばドラゴン一匹一匹にも名前ぐらいあるよな・・・。

あたし名前聞いてねーや！

ん？あ、そういえばこれ夢だったっけ。

夢だと気づいたが、いつになったらこの暗闇の中から抜け出しおきれるんだろう・・・。

そんなことを考え、しばらくして私は深い眠りについた。

五　音を手に入れた世界

私は目を覚ました。

目を覚ましたけど。そこに父さんはいなかった。

まだ病院の先生と話し込んでいるらしい。

全部思い出した私は、近くにおいてあった愛読書を開いた。

父さんがわざわざもって来てくれたのだろう。

その本の背表紙には力強いドラゴンの絵が描かれている。

「ドラゴン・・・か。」

見えるはずないんだが一応自分の背中にむいて話しかけてみる。

「ねえ、もういるんでしょ??現実なんだよね?病気なわけないもん。」

「・・・・・。」

「・・・・ねえってば!」

その時、ガラッと病室のドアが開いた。

「美智霞?誰と話してるんだ??」

「父さん・・・。ううん、なんでもない。音読してみただけ。」

苦しすぎる言い訳・・。

父さんはその時なぜか、不安や恐怖を感じるかのような顔をしていた。

まるで何かを恐れるような・・・。

すると次に医者が入ってきた。

「美智霞ちゃん、君の病気、病名が分からないんだ。
背中にはおかしな痣(あざ)があるし、健康そうには見えるんだが背骨に異常があるんだよ。」

医者には悪いけど私にはおおよそのことは分かってるし、
私が死ぬわけでもないことも夢の内容を思い出して分かった。

でもおそらく、私はここに居座らされ続けれのだろう。

「先生。娘は後どれぐらい生きられるんですか??」

父さんは先生に小声で尋ねている。

「おそらく持っても1年かと・・・。病名が分かりませんので分かりませんが・・・。」

すると、医者は思い出したかのようにはっと目を見開いた。

「そういえば私、一度同じような患者が・・・・・。」

医者のボソッとしたささやきを父さんはさえぎった。

「先生。娘を学校にやれないんですか??」

「危険かと思います。しかしもし彼女が残りの人生を普通に過ごしたいと願うなら・・。」

「先生。私学校行きたいです。私耳聞こえなかったけど、聞こえるようになったんですよ。この耳で、死ぬまでにたくさんの音を聞きたいんです
皆の声も・・・・。」

それにもういじめようが、私はいじめてくる奴らが何をいってるのか聞き取ることができる。

私にとっては今までで一番最強の武器を手に入れたようなものだ。

「本人がそう望むのなら、止めません。しかしくれぐれも健康には気を遣ってください
少しでも長く行きたいのなら・・・。」

医者さんよお、それは違うよ。

私病気じゃなくてドラゴンが行ってた副作用だから。・・・・多分?

あいつ私なら副作用でないとか言ってたのにどういうこと??

それにさっき話しかけても全然返事しないし。

「じゃあ父さん、退院の手続きしてくるから。」

父さんはそういって病室を後にした。

医者もその時一緒に出ていった。

その時ふと医者が言っていた背中のあざのことを思い出した。

そういえばと思ってトイレにある鏡で確認しようとする。

私は決して身長は大きいほうじゃないので

背伸びしないと自分の背中は見れない。

「よっよとっと！」

精一杯伸ばして後ろを向いて見えた痣はとてもこの世のものとは思えない模様だった。

不思議な模様とかそういうことではなく、

直感がそう判断を下したのだ。

先入観があるせいもあるかもしれないが、

痣にしろ刺青にしろ無理なのだ。

模様は意外とシンプルで誰にでもかけそうだが

白い炎が小さく、しかし強く燃え盛っていたのだ。

誰でも直感でそう思うだろう

こんなものがあれば。

私はその後、そこで気を失ったらしい。

近頃、倒れてばかりだ。

しかしそれも仕方ない。

立て続けに、信じられないことばかり起きたのだから・・・。

六　たくさんの声に囲まれて

父さんが私を見つけてくれたらしい。

医者は心配そうに私を見つめ、

「本当に退院するのかい？」

としつこく聞いてくる。

別に本当はただ吃驚（びっくり）しすぎただけだから

健康に以上はないのだけれど。

「はい！私元気ですから！大丈夫です。」

にっこりと私は医者に微笑んだ。

この医者には何かと心配をかけてしまった。

なんだか上から目線になってしまっているが仕方ない。

真実を知っているのは私だけだもの。

病院の自動ドアが『ウィーン』と音を立てて開いた。

変な音・・・。機械音て奴かな？

初めて聞くその聞きなれない音に私は驚きつつも喜んだ。

ドアを抜けて外に出ると、すごく強い風で私の髪がバサバサとなびいた。

さらに、風はヒューと耳元で音を立てて私の横をすり抜けていく。

とても心地よい音だ。きれい。

私が歩く音、父さんが歩く音、父さんの声、私の声、気がガサガサ揺れ動く音

こんなに身の回りには音があふれていたんだ！

私はつい楽しくなり、ヒューと風の声を真似しながらスキップを始めてしまった。

中学生にもなってと思うかもしれないが
私にとってはそのくらい嬉しかった。

「父さん！風ってきれいな声してるね！！」

私は微笑んでいる父さんに向かって叫んだ。

すると私が風の音を声といったことにちょっと驚いたようだったがすぐに微笑み返し、スキップしていた私を呼び止め、手招きした。

「母さんの声も風の声みたいに透き通っていてきれいな声だったよ」

「！」

私は母を憎んでいた。

なぜ私なんかを生んだのか。生まなきゃ良かったのにと。

しかしそれと以上に母に会いたいという気持ちもあった。

思わずなきそうになった。

父は心配性だから、父さんの前で泣くと

迷惑がかかる。

「うっ、なっなんで？何で母さんは私なんか生んだの？

何で私なんか生んで死んじゃったの？」

「・・・。」

父さんは薄く微笑むが答えない。

「ねえ！なんで？」

「父さんはね、母さんは十分幸せだったと思うよ」

「？」

父さんは不思議すな顔をする私を見つめていった。

「いずれ分かるさ。母さんが残した娘なら。いずれ・・・いずれね。

だからまだ知らなくていい。大丈夫だから。」

少し悲しげに笑う父さんの顔を見て私に「うん」以外いえるはずもなく
こくっと軽くうなずく。
そうして私たちはゆっくりと家路を歩き続けた。

次の日学校に行くことになった。
前まで行きたいなんて微塵も思わなかったが、音が聞こえるようになったのだ。
一番楽しみなのは走るときの風を掻き分ける音。
この前父さんと聞いた風の音とは別物らしい。
「おはよう！桜夢！」
クラスの男子だ。馬鹿にしたように私に挨拶をする。
私はさわやかに、しかし嫌味をたっぷりこめて挨拶を返す。
「おはよう。田名部さん」
彼は目を丸くし、怯えるように教室に向かった。
『意外だな。いじめてきてた奴だろうが。もっと嫌な事言ってやりゃーいーじゃねえか。』

！！！

「誰！」

生きよい良く振り返るけど私の後ろには誰もおらずただ長々と廊下が続いているだけだ。

そこで私は忘れていたあることを思い出す。

「ドラゴン・・！？」

『そうだよ！忘れるとかひでーよ！！願い叶えてやったの俺だろー？？』

「・・・。私あんたに聞きたいこと山ほどあるんだけど。」

『ぎくっ！おっ俺はないんだが・・・。』

「昼休み、屋上でたぁ～ぷり聞かせてもらうからねぇ～？」

『・・・・・・。』

『美智霞？誰と話してんの？？』

「あ！」

私に文字の書かれた紙を見せてきたのはクラスで最近筆談するようになった

佐井籐　愛海梨　。

休み時間とかたまにはなしかけてくれてた子。

「！美智霞！耳聞こえるの！？えっ嘘！」

私は照れくさそうに笑う。

「昨日朝起きたらまあよく分かんないことになってて・・・。
うん。まあそれで昨日は休んだの。」

「そっか～・・・。そんな、奇跡みたいだよ～！！
もうテレビとか出ちゃうんじゃない？
『耳を手に入れた女』的な感じでさあ！」

「もう！そんなわけないじゃない！」

「ていうか、美智霞って声きれいなんだね！」

「へ？」

私はその時昨日父さんが行っていたことを思い出してしまった。

「私ちょっと先行くね。」

「え？あっうん」

私は小走りで教室へ向かった。
父さんの言葉が頭の中で何度も響く。
『母さんの声も風の声みたいにきれいだったよ』

教室では気持ちの沈んでいる私とは裏腹に
皆が私の耳が聞こえるようになったことを知り、とても騒いでいた。

七　奴の正体？

教室は大騒ぎだった。

どうやら、先ほど挨拶を交わした田名部が広めて回っているらしい。

「・・・え！うそ！」

「信じられない！！」

「今まで聞こえないとかいって、シカトしてただけじゃないの？？」

「いやでも、それは違うよ！だって黒板のキイーって音立てても平然としてたもん！」

「その音平気な人ぐらいいるよ！」

たくさん声が聞こえる。

ああ、皆の声ってこんな声してたんだ・・・。

楽しい。今までこんなに学校にいるのが楽しいと思えたの初めて！

亜莉奈といたときもずっと本当は不信感にかられてたもん。

亜莉奈が友達に何を言ってるのか、

私の悪口言ってるんじゃないかとかそんな事ばかり考えてた。

亜莉奈が私から離れたのは、裏切ったからじゃないのかもしれない。

私が亜莉奈に抱いていた不信感が嫌だったからじゃないか。
自分なりに思考をめぐらせて見る。
「ねえ、桜夢さん！私の声聞こえるの？ほんとに！」
クラスの女子が私を見つけて、走ってくる。
「うん。聞こえるよ。私皆の声聞こえるようになって幸せだよ！」
本当に幸せだった。
今まで話さなかった子とも仲良くなれた気がした。
授業も先生の話がたくさん聞けて、皆と一緒に笑うことが出来た。
楽しかった。
「ご馳走様でした！」
皆で挨拶をして、昼休みにはいる。
給食当番は食器などがのったワゴンを2階の給食室まで運ぶ。
私にも一応用事がある。
奴・・・ドラゴンにいろいろ聞かせてもらうのだ。

私はすっと立ち上がり、走って屋上へ向かう。
普段は屋上は人が少しいるのだが、今日は3年生が球技大会。
ほとんど人がいない。
良かった。今日、三年生が球技大会で。
息を少し切らせながら、思い切り屋上のドアを開ける。
良かった誰もいない。
ドアから少し離れ見晴らしのいい位置に座る。
「聞こえてるわよねえ？ドラゴン？まず私あんたの名前知らないんだけど・・・。」
『・・・・・・。』
「おい！聞こえてんだろ！！」
『・・・・・。』
「私ここから飛び降りるから。もともと捨てたような命だし。」
屋上の柵に足をかける。
下を見ると外で男子がサッカーをしている。

高い。怖い。

『はあ～もう分かった、分かった！話すから。』

「それならよろしい。」

『俺はクウィルバー・ジバルトン。クウィルバーでいい。』

「そう。じゃあクウィルバー。何であんた私が病室で話しかけたとき返事しなかったの？」

『ん、だってお前の背中おかしいんだよ！巣になる素質は十分あるのに

入りずらくてさ・・・。』

「もしかしてそれで、副作用が起きたの？？おきないだろうとか言ってたのに。」

『しゃーねーだろお？今はまあぴったりおさまってっからＯＫだけどよう。』

「それとクウィルバー、あんた何者？？

ある事情があってこの世界にいる、見たいなこと言ってたけど、事情って何？？」

『ホントは人間どもにあまり知られたくないんだが、まあじゃねえと話が進まねえ。

俺の用事もできねえからな。』

「・・・。分かった。秘密にする。これで良いでしょ？

私もあなたの事誰にも知られたくないし、知られたら何されるかわかんない。

私にはあなたのこと周りに言うことはできないのよ。」

『俺はまあお前らが察するように、ドラゴンとかそんな類(たぐい)だ。

正確には、Ｄｒａｇｏｎと英語にして欲しいが、ドラグルス、それが俺たち

ドラゴンの名称。ドラゴンは世界の名前なんだ。国はいくつもに分かれていて

インドリブス、キラグラブス、ミリノリアス、タヅロイクス、ハニギシアス

でかい国はこのくらい。全部語尾に「ス」がついている。

ほかにもちっさい国はいくつかあるんだがそれはおいといて。』

「あんたはどこの国なの？？」

『あ！俺？俺はミノリアスだ。

ってそうじゃなくて、ほかに説明しときたいことがあるんだ。

語尾に「グス」がつく国が二つあるだろ？ほかにも「アス」がつく国も二つ。

そいつらは、建国当時から仲が良くて、同名結んでんだ。

「クス」がつく国がひとつある。

そこはどことも同盟組まずに繁栄したんだ。

平和主義でな、緑のきれいな国だ。

・・・。ていうかホントは昔は同盟を結んでた国はあったらしいんだ。

だけど、滅びちまって・・・。』

「あ～もう無理。異世界だとか国だとかもう訳わかんない！！ていうか、説明下手だよ。クウィルバー。ドラゴンって頭悪いの！？」

『・・・。教えろっていったのお前じゃねえか。

しかもドラゴンじゃなくてドラグルスだし。

それにドラゴン人間どもに比べたら、ず～っと頭いいし。』

クウィルバーはぼそぼそとつぶやく。

私は背中に向けて鋭いまなざしを向ける。

「なんか言った？」

『いや？空耳じゃないか？』

「まあいいよ。それより用事聞かないと。」

『ああ、それでだ。お前らの言う海みたいなものが俺らの世界にもあるんだ。

俺らはそこ、シーマリズに入ると毒されるから今まで誰も入れなかったんだが

この間、誰かが魔法で強力なバリアー張って潜ってみたらしいんだ。

そしたら・・・。』

「そしたら？」

『そしたら、別の世界とつながってたんだ。』

「それってこの世界のこと？」

『いや違う。この世界と俺らの世界は空でつながってんだ。

まあ、俺らの魔法がないと通れないがな。

それで偵察にいったやつらは戻ってこなかった。

次の日見に行くとそいつらの首が浮かんでた・・・。『

「っ！」

『それでまあ全面戦争になりそうなんだ。

ただ世界が違うといろいろ違ってな。

あいつら魔法に対する耐性が以上なんだよ！』

「それで、私たちに何かしろと。」

『いや。違う。お前ら弱いから。』

私は眉間にしわを寄せるが言い返さない。

正確に言うと言い返せないんだ。

『俺らはこの世界の海の向こうにある世界、その世界からあいつらの耐性が弱い

物を取ってこなくちゃいけないんだ。いやもって帰るんだ。必ず。』

どうやらドラグルスは相当異世界について知っているみたいだ。

私たち人間はこの狭い世界のことしか知らないのに・・・。

「・・・？ならひとりでいけばいいじゃない。」

『そうはいかねーんだ。ドラグルスと人間がいないととうれないらしい。

というか一回試したが海の底があるだけだったんだ。』

「はあ、それで私に手伝えと。」

『お願いします。』

「まあ契約だから、仕方ないし。」

私はよっこらしょと立ち上がる。柵に手をかけて空を見る。

「ドラゴンの世界か・・・行ってみたいな。」

『いいぜ。お前が手伝ってくれたらな。皆歓迎するだろう。』

「本当！私やる！頑張る！」

その時屋上のドアが開いた。キイっと嫌な音が鳴り、

私に近寄ってくる。

「美智霞、あんた誰と話してんの？」

どうやら、奴と話すにはそれなりのリスクがあるらしい。

変人扱いされてしまう。

・・・。変人かもしれないが。

八　忘れ物。

・・・・。

すっかり忘れすれていた。

普段背中の痛みは感じない。

忘れててもしょうがない事かもしれないが、大問題だ。

背中の模様、異世界のものだということはさっきの話でおおよそ見当がついた。

だが、あの白い炎。なんなんだ。

ていうか、プールとか入る時どうすんだよ！！

丸出しじゃねえか！

私はクウィルバーに聞こうとしたが、屋上には人が来てしまったし、今話すわけにもいかない。

う～～～～。さっさとどっか行ってくれ～。

おお！あそこなら♪

「ゴメン、ちょっとトイレ！」

私はそわそわしたそぶりを見せて、屋上から立ち去る

ナイスアイディア！私！

「へ？え！ちょっちょっと美智霞～？もうすぐチャイム鳴るよ！」

その時すでに私は遠くへ逃げていたため、聞こえるはずもなく。

トイレに駆け込み、制服を後ろ側に強く引っ張る。

模様の先っちょがはみ出て見え、炎は先端が揺れ動いている。

「ねえ？これ何なの？聞くの忘れてたけど。」

『はあ？ああ、それ。何回も説明すんのめんどくさいんだけどな～・・・。』

「私どうやってプール入るのよ！」

『そんなの俺の知ったことか！』

「知ったことだ！宿主がどうなってもいいって言うの？？」

『命さえあれば別にかまわねえよ！』

「いいから教えろ～～～～！！！」

私の怒鳴り声が、トイレから漏れ、長い廊下に響き渡る。

「は！いっいいから教えてよ。」

『しつこいな～。だから俺が住んでる印的なやつだ。
この世界には、ほかにもただ、住む目的だけできてるドラグルスもいるからな。』

「それで、ほかに渡されないようにするために。」

『そう。だから仕方ないの。さっさとあきらめろ。』

「仕方なくねえだろ！」

『仕方ねえよ！』

「とにかく今日家に帰ったら聞きたいことたくさん用意しとくから覚悟しといてよ！」

『俺は寝る！さらば！』

「私を宿主にしたのが運のつきね。さっきの説明もよく分からなかったし
今日家に帰って話を聞いて、まとめることにしよう。」

『・・・。』

無言のクウィルバー。まあ、どうせ逃げられやしないんだから
聞く機会くらい何度でもある。

私はチャイムの音を聞き、騒がしい教室に向かった。

いろいろと忘れていたことを思い出しすっきりしていた。

しかし私はひとつ心配すべき問題を忘れていた。

クラスの男子の田名部は尋常でないおしゃべりなのだ。

九　勘違い??

田名部。

奴は、ツウィッターとか、いろいろチャットとか、ネットでしていて口が軽く、何でもかんでも、人に広めてしまう。

まあ、別にそれはいいと思っていたが、今回は別だ。

なのに私は気づかず・・・気づいたところで何もできやしないのだけれど・・・。

そう、生まれつき声が聞こえなかった人が、ここまで完璧に完治するのは

私がこの国で初めてらしい。

しかし、私が治ったのは、医者とか薬とかのおかげじゃなく

異世界の力のおかげだ。

しかしそれを言うわけにもいかず・・・・。

誰に言ってはだめか?それはこの世界中の人にだ。

正確に言うならば、メディアだ。

耳が聞こえるようになって二日目。

学校終了のチャイムが鳴り、今日は部活をせずに帰る。
一応、医者から初日と二日目は部活をするなといわれているためだ。
「はあ～。まあいっか。明日からできるし。」
仕方なくかばんを担ぎ、家に向かう。
私は家に着くと、いすに腰をかけ、ゆっくり牛乳を飲む。
「～っぷは～！！やっぱり牛乳最高だわ！」
父さんが帰ってくるのはいつも夜の８時前後。
本当は週に一回ほど飲み会があるらしいが、父さんは私に気を遣ってほとんど参加していないっぽい。
夜の７時ごろになり、キッチン近くの電話の子機がプルルルルルっと音を立てる。
誰からだろう？
お父さんからかな？
そう思って電話に出ると、聞いたことのない声聞こえてきた。
「もしもし？わたくし、〇〇メディアの半澤と申します。桜夢さんでよろしいでしょうか。」

「はっはい。」

「〇〇メディアでは今度聴覚スペシャルを取り上げたいのですが・・・。」

ぴんと来た。知ってるはずないとは思ったがピンと来た。

私は思い切り電話のボタンを押し、電話を切った。

ほっとするのも束の間。

また電話がかかってくる。私は電話の機能などまるで知らないので

ハンカチを、音が出る部分にぐるぐる巻きにしてできるだけ音を抑えた。

しかし、電話の音はいっこうにやまず、もうすぐ8時を迎えていた。

父さんが帰ってくる！私は仕方なく電話の電池を抜き、ポケットに隠した。

急いで二階へ駆け上がるとその頃ちょうど父さんの車の音が聞こえてきた。

私はもうこれで大丈夫だ、そう思っていた。

しかし、もうひとつ心配しなくてはいけないことを思い出した。

「！父さんの携帯！」

私は下の階へ駆け下りた。

「父さんお帰り。ご飯何にするの??」

「ん?今日はな〜。肉じゃがにしようと思うんだ。
しかし珍しいな?美智霞が父さんに夕飯を聞くなんて。」

「そんなことないよ。おなかへってたから。」

「じゃあ早めに作るな」

私は父さんとともにキッチンに向かう。

父さんはキッチンに行く途中で、リビングにかばんを置いた。

よし!

父さんは基本的に携帯電話をかばんの一番小さいポケットに入れている。

私は着信がないことを確認し電源を消す。

「そういえば今日、会社の人から電話があるんだ。
この前父さんが作ったお菓子会社で配ったら、部長が食べたいって。」

私はびくっとする。

どうしよう・・・。

でもあれを父さんが聞いたら・・・・。
巻き込みたくないし。
私は仕方なく携帯の電源をいれた。
家の電話の電池を入れて、私は先ほどかけてきた人から電話が来るのを待つ。
私はあまりに驚いてしっかり考えていなかったがよく考えたら、ちゃんとしっかりきっぱり断れば何とかなるかもしれないじゃないか。
すると手に抱えていた受話器がぶるぶる震えて音が鳴った。
私はすぐにでる。
「はいもしもし！」
「先ほどお電話しましたものですが・・・・。」
「わたくしその件お断りします。」
「え？ちょっちょと待ってください。話も聞かずに・・」
「いえ。言いたいことは大体分かってるので」
「あなたのご家族に耳が聞こえない方がいらっしゃると聞いて取材したかったのですが・・・・。」

「・・・へ？」

「お断りされるというなら結構です。すいませんでした。」

ツーツーツー。規則的に音が鳴るだけでさっきの人の声はもう聞こえなくなった。

私は拍子抜けして、

しかし、ほっとした顔で父さんの作った肉じゃがを食べることにした。

十　聞きたかった音、聴きたくなかった声

結局あれは私の勘違いだったようだ。

それからというもの、あのような電話はかかってこなかった。

いろいろな事がありすぎて、ちょっと過敏になっていたのかもしれない。

すこしその「いろいろ」が落ち着いて、ふと思い出した。あのこと・・・。

私が病院にいくことになった前日のことを・・・・。

私はあの日見たことを「いろいろ」よって忘れることができていたが、

ふと、こう落ち着くと思い出してしまう。

あの後彼らはどうなったのだろう・・・。

「はぁーーー。」

深いため息をつく。どうせなら思い出したくなかった。

・・・。それでも私は学校に行く準備をする。

まだ、走るときに聞こえる風の音も聞いていないし、学校も楽しくなってきたところだ。

できるだけ避けよう。

そういえば最近、亜貴斗とは会っていない。

多分すれ違っても気づいていないだけだろうが。

むこうから話しかけることはほとんどないし・・・。

私は学校の大きなかばんを肩にかける。

「父さん。行ってくるね！」

「は～い。行ってらっしゃい。」

スーツ姿の父さんに見送られ早歩きで向かう。

「ここの世界は空でドラゴンと、海でまた別の世界につながっている・・・。

ドラゴンとここで言う海であるシーマリズによってまた別の世界がつながってる。

それで、私たちは自然。ドラグルスは魔法、それから・・・。」

「ええと、じゃあここのページ桜夢さん。・・・は耳が聞こえないのだったわね。」

思わず異世界のことに夢中になっていた。授業も聞かないと・・・。

「せんせー！桜夢さんは～この間の欠席のときに耳が聞こえるよう

になったんですよ～？
聞いてないんですか～？？」
また田名部だ。くそ。いつも邪魔ばかりしやがって・・・ってこの前のは勘違いだったんだ。
「じゃあ、桜夢さん？９８ページの７行目から１０行目のこの文、読んでくれるかしら。」
「は、はい。」
私はあわてて、教科書に書いていた落書き・・・というか世界についてのまとめを消し、
黙々と音読し始めた。

学校終了のチャイムが廊下に響き渡る。
我が校舎は廊下がとてつもなく広いので音がとにかく響く、響く！
私はチャイムがなり始めるとともに教室を出た。
今日こそ部活に出るんだ！
部室に向かおうと廊下を走り出すと、ある二人が同時に私の視界に飛び込んできた。
まあよくあるパターンだ。

二人と言ったら彼らしかいないだろう。
私がドラゴンの巣になる前日に見た亜貴斗くんと、凜禰だ。
本当のところ、彼ら二人だけが見えたわけでもないし、
彼らが一緒にいたわけでもないのだが、私の目はその二人しか捉えることができなかったのだ。
私は思わず振り向く。
と、亜貴斗くんと目が合ってしまった。
「あ！美智霞？ちょっちょと待ってよ！」
その場から逃げ出してしまった私は部室に逃げ込む。
いくらなんでも部室には入ってこれないし。
私は着替えを終えて暫くした後に、ドアを少し開けて隙間から外をのぞく。
「だ、誰もいない？？」
ほっとして、ドアを開けてみたところ目の前には、
普通そこにいたら変人扱いされる人が立っていた。
「亜貴斗くん？」

「みっみみ、聞こえるようになったんだって？教えてくれてもいいじゃんか
小学校から仲良いんだからさ」
「仲良い？」
「え？違った？」
違わないと良いんだけれど、どちらにせよ
私は忘れられないことがあるから、亜貴斗くんとの間には大きな壁が感じれる。
しかし今となっては、なんだかこんな事もどうでも良くなってきた。
・・・どうせこいつは凛禰のこと好きなんだし、
今言ってるのだって所詮くどき文句とかその程度のこと。
好きになってもしょうがない。
「んじゃ、部活頑張れよ！」
しょうがないのに・・・。
嫌な奴・・・でも、良い奴。
「うん・・・。頑張る。」
私はちからなさげに手を振る。

それを見て亜貴斗くんは走り去っていった。

「・・・はあ～。・・・・・・・・・。よしっ！」

私は気を取り直してランニング用のシューズに履き替える。

靴紐が解けないようにきつく結び、一人ウォーミングアップを始める。

一人で体操するのは少々恥ずかしいが、怪我しないためだし、もう慣れた。

私は校舎の周りを２０周ペースを決めて走ることにした。

わくわくする。

呼吸を整え、体を前に倒す。

『ピピピッ』

時間を測るための腕時計が鳴った。

「はっはっはっ」

規則正しい呼吸音が私の耳に入ってくる。

風。風は・・・。

『ヒュ～』

私が退院した日に聞いた音となんら変わりは無かった。風の音は。
私が聞いたのは風の音だけじゃなかった。
自分の呼吸音。風の音。私の足音。野球の掛け声。髪が風に揺られる音。
ほかの人の足音。さらには車の音さえ。
私の耳に入ってくるすべての音が、互いに協調し合い、
すばらしいハーモニーを作っている気がした。
風の音はどこで聞いても同じな場合が多いが、
確かにこの音たちと一緒に聞いた風の音は格別だった。
私は気持ちよくなって、リズムに合わせるように走り出した。
幸せだ。なぜ皆こんなに身近にある幸せに気づかないんだろう。
不思議だ。
私はそのまま時間も忘れ、２０周を超えて走り続けた。

壱拾壱　引継ぎ

私は目を瞑る・・・。

・・・今日はやけに疲れた・・・。

亜貴斗と凜禰には会うし・・・・というか私が最近気にしなくなっていただけなんだけど。

私は毛布にくるまり、そのまま眠りについた。

ああまたこの夢だ。

真っ暗で何も無い・・・。ただあるのは、気迫・・・。

「なあに？また私に用？？」

私はその気迫の根源に話しかける・・・。

「・・・・。」

珍しく無口だ・・・。と言うか無視されたし！

「ちょっと！返事ぐらいしたらどうなの？？」

「・・・・・れ・な・・・。」

「？何て？」

「・・・忘れるな・・・・。」

私の耳にぎりぎり届くか届かないかの声でしゃべる。

「忘れるなって何を・・・・？」

「・・いずれ気づく・・・・気づかなければそれまでだ。
お前の母の思いを・・・・。」

「母のことなんて何も知らないのにどうや・・・・」

「・・・・って」

目の前には、私の父さんがいた。

「父さん？？」

「昨日疲れてたみたいだけど、大丈夫なのか？」

「へ？大丈夫、大丈夫！」

「・・・・。ところで朝だぞ。７時」

「・・・はあ。はあああ！？」

私は急いで飛び起きる。

走って父さんが作ったオムライスを口に掻き入れ

家を出る。

「いっふぇふぃふぁ～ふ！」

「のど詰まらせるなよ！いってらっしゃい！」

それにしてもなんだったのだろう。

そもそも誰だった？

クウィルバーはしゃべり方はもっと荒っぽいし、声も低い。

きれいな声だったけど・・・ドラグルスだろうと言うことは大体想像はつくんだが・・・。

「おい。クウィルバー？お前かさっきの。」

『は？俺昨日爆睡してたんだけど』

やっぱり声もしゃべり方も違う。

まあ異世界の生物なんだし、声とか帰れる昨日あってもおかしくないけど。

『さっきのってなんだよ』

「ほんとに違うの？？」

『だから何が！』

「・・・ならいい。いや良くないけど。」

私があんな夢見たのクウィルバーと契約したときだけだし・・・。

「あ！おはよ♪美智霞！」

クラスの子だ。

「朝から元気だね。」

「うん！」「明日学校休みだからすごい嬉しい！」

「そっか～。明日学校休みだしね」

「！何で私が喜んでる理由分かったの??」

なんだろう?今言ったじゃないか。

「だって今言ったじゃ・・・」

言いかけたとたん、クラスの友達は私に抱きついてきた。

「すごーいすごーい！！超能力?エスパー?」

「いや違うし。」

「じゃあじゃあ次は私が当てちゃいます。」

「何を・・・。」

「美智霞がきょう少しローテンションなのは・・・・・怖い夢を見たからです！！」

「！って違うから！夢は見たけど怖くなかったし。」

「おう！夢見たんだ！私エスパー？すごい？」

「すごいすごい」

私たちははしゃぎながら学校まで笑い続けた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2282ba/

Nest of　Dragon　～炎の契約～

2012年1月14日08時45分発行